



コメント 1

Prof. Atreyee Sen の議論を受けて

松尾 瑞穂 (国立民族学博物館准教授)

Mizuho Matsuo (National Museum of Ethnology)

私はインドを調査対象とする文化人類学を専門としておりますが、今日は、ジェンダー研究の視点から、コメントをしてみたいと思います。

まず、バッフェツリ先生のイントロダクションにもありましたように、女性と暴力をどのように考えるかということが、このシンポジウムのひとつの大きな問題提起だと思います。

戦争、テロ、暴力というものと、女性との関わりについては、犠牲者としての女性、という視点が中心でした。そこから、加害者としての女性、という視座が登場してきます。80年代以降、日本の女性史研究においても、いわゆる被害者史観から加害者史観へと視座が転換していき、これを上野千鶴子は「反省的女性史の現れ」とまとめています。

具体的には、女性によるこれまでの戦争への加担や、戦争責任というものを、女性史、ジェンダー研究の中で問い始めた、ということがあります。日本の文脈でも、こうした研究は非常にたくさんの蓄積があり、女性が歴史の主体 agency であることを認めるのであれば、同時に、歴史に対する責任を逃れることもできない、と位置づけられています。

私自身を振り返ってみまして、女性と暴力、とくに加害者としての女性を、初めてはっきりと思い知らされたのは、2004年の、イラクのアブグレイブ刑務所での、アメリカ軍の女性兵士の映像でした。ご存知の方もたくさんいらっしゃると思いますが、刑務所の収容者に対する残虐で非人道的な行為を行っている写真の中に、女性兵士も写っていて、もう10年以上前の出来事ですけれども、女性もこのような暴力の加害者となる、ということに衝撃を受けました。

こうした女性と暴力というものは、戦闘員・兵士・テロリストといった、ダイレクトに暴力や戦争と関わるレベルから、いわゆる銃後というか、後方支援として、とくに、太平洋戦争下の日本の女性が行ったことも含めてですが、戦争

女性と暴力

- ▶ 女性と戦争、テロ、暴力：被害者 (victim)としての女性から加害者としての女性という視座の登場
- ▶ 80年代以降、女性史における「被害者史観」から「加害者史観」への転換
⇒ 「反省的女性史 Reflexive Women's History」
- ▶ 具体的には、戦争加担や戦争責任
- ▶ 「女性が歴史の主体agencyであることを認めれば、同時に歴史に対する責任を逃れることもできない」（上野2009 (1998) : 30)

女性と暴力

↑ ↓

- ▶ 戦闘員、兵士、テロリスト
- ▶ 戦争協力：消極的～積極的
- ▶ 女性運動家（イデオログ）：目的を達成するための手段として体制、暴力に加担
- ▶ 家父長制下での女性による女性への暴力
- ▶ 被害者

⇒ 誰の立場、視点をとるのか

協力というかたちで、非常に消極的なものから積極的なものまで、暴力への協力という関りがあると思います。

さらには、知識人や運動家が、目的を達成するための手段として、暴力に加担することもあります。例えば私は、女性のリプロダクションの研究をしています。1920年代の女性にとって、避妊や中絶をするということは、国家との闘いが求められる、女性にとっての権利獲得運動でした。それで女性の活動家たちは、当時は禁止されていた避妊をするために、例えば優生学思想のような、当時の国家体制と親和性の高い、質の高い良き市民を作るというイデオログに自らのポリシーを関わらせながら、産児制限というものを達成する、ということを行っていました。このようなかたちで、女性の地位の向上、女性の参政権の獲得、産児制限の獲得、といった目的を達成するために、ある意味暴力に結果として加担していくということも、歴史的にはあったと思います。

さらには、女性と暴力の関わりを非常に見えにくくしているのが、家父長制の下での女性による女性への暴力を、どのように考えるかということです。

私は、インドの農村で、子どもができないことは半人前なことであり、女性性からの逸脱であるとする、ヒンドウーの規範的な考え方により、子どもができない女性たちが、家族や親族や夫、さらにより広いコミュニティから、劣った人間として扱われている中で、どのように自らの agency を発揮しているのか、ということはずっと研究しています。

その中で、非常に微細ではあるのですが、家庭内、あるいはコミュニティの中で、年長の女性による女性への暴力が、女性の suffering をさらに増長するようなかたちで存在しています。こうした微細な暴力をどのように捉えればいいのか、ということに私は関心を持っています。

セン先生のプレゼンテーションにもありましたように、女性と暴力との関りを、どのような立場から、だれの視点から考えたらいいのか、というのは、ジェンダーを研究している人間にとっても、とても難しい問題だと思います。

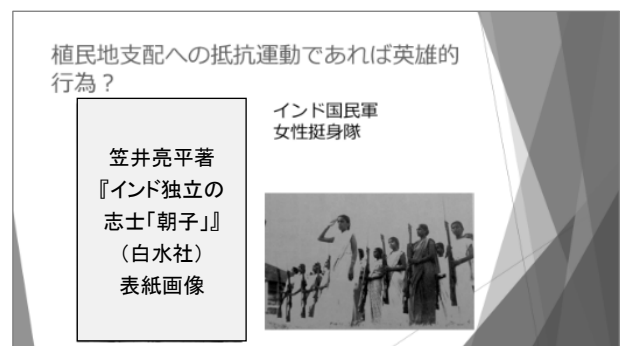
暴力行為 や radical movements への女性の動員を、これまでジェンダー研究の立場では、学問的に捉えるということは、おそらくほとんどしてこなかったと思います。そのような意味で、本日のシンポジウムの議論は大変興味深く、勉強になりました。そしてやはり、だれの立場、だれの視点で、こうしたことを語るのか、ということが、問題提起として、私の中に残っています。

女性と暴力との関りを、どのような視点から見ればいいのか、ということについて、インドの文脈で少し考えてみたいと思います。

女性による暴力や戦争への加担は、帝国列強への抵抗とか国家の独立、といった大義名分の下では、非常に英雄的な行為として称えられ、受け入れられる、と考えていいのでしょうか。

例えばインドでは、1940年代のイギリス植民地支配下、イギリスからの独立を目指す、インド国民軍というものの一部の活動家によって組織されました。そこに、マレーシアやシンガポールに住んでいたインド系住民の女性たちが、志願兵として加わり、訓練を受けて、祖国の独立を海外からサポートする活動をしました。インパール作戦と呼ばれる、日本軍との協力の中で、ビルマを通過してアッサムに入り、そこでイギリス軍と戦いながら、インドの解放を目指す、といった活動をしたわけです。

実際にインド国民軍の中で、女性の部隊が具体的にどのような活動をし、どのように戦地で戦ったのか、ということは、ほとんど知られていません。しかし、日本の敗戦後、インド国民軍の将校たちがイギリスの裁判で戦犯として裁かれようとしたとき、インド国民は、彼らは愛国者であり、祖国のために戦った英雄として扱い、イギリスに対



して抗議、抵抗をしました。こうしたことが、1947年のインド独立を早めた、ナショナリズムを喚起するひとつのきっかけともなったとも言われています。ですから、インド国民軍に加わった女性兵士も、祖国の解放、イギリスの植民地からの解放のために戦った、ということに関しては、英雄的な行為として賞賛されたとも考えられます。

ところが、先ほどセン先生の発表にもありましたが、スリランカのシンハラ系とタミル系の国民の間の内戦で、タミル人民解放の虎、いわゆる LTTE と呼ばれる反政府組織が、インドの首相やスリランカの首相を暗殺しています。その際に、女性の活動家による自爆テロ、自爆行為がとられています。

この LTTE は、自爆テロ、自爆行為が非常に突出していると言われています。インドのラジーブ・ガンディー首相は、タミル少女による自爆行為によって 1991 年に暗殺されています。タミルナードゥ州というところで、花輪をガンディー首相に捧げようとした少女が、自爆したのです。この場合、彼女たちは「テロリスト」として、インドの文脈の中では犯罪者であり、批判され、報復を受けるべき対象となったわけです。

このように、どのような行為をテロや反政府的行為であり、また、どのような行為が愛国的で賞賛されるべきなのか、というのは、どのような視点から見るとによって、大きく変わってくると思います。

一方、インド国内の文脈の中では、マハトマ・ガンディーによるイギリスからの独立運動の中では、女性の動員が大規模に行われました。

女性は、男性よりも、より道徳的な力が強く、忍耐があり、そして、勇気があるのだと。だからこそ、女性が非暴力運動である独立運動のフロントに立って戦うことがふさわしい、とされました。このときが、インドの大衆女性にとって、初めて政治的な主体となる契機であったと言われています。

非暴力であるということが、女性性と大いに結びつけられ、そこに、女性というのは特別な精神性や道徳性がある、と見なされる。これはジェンダー研究において、今まで使われてきたレトリックだと思いますが、しかしそうしたものでは、もう語り得ないものがある、ということ、今日のセン先生の発表から、大いに考えさせられました。

一方、私自身の研究に引き付けて考えてみますと、よりもっと微細な、例えば家庭内とか、人間関係の親密な空間の中で行われる暴力をどのように考えたらよいだろうか、ということが、個人的な関心としてあります。

例えば、サティー(寡婦殉死)という、夫が亡くなったときの葬儀で、妻あるいは妻の一人が、夫の遺体と共に焚き木の火に焼かれるという、インドのごく一部の階層で行われていた「宗教」的行為があります。こうした行為は、

民族運動は「テロリスト」?

- ▶ 1991年 Rajiv Gandhi首相の暗殺
- ▶ 女性によるSuicide bomb
- ▶ スリランカ内戦-タミル人民解放の虎 (LTTE)のWomen's wing

ラジーブ・ガンディー 首相画像

女性兵士画像

女性にふさわしいのは非暴力?

- ▶ M.K.ガンディーによる反英独立運動への女性の動員 (1930年代〜)
- ▶ "Women have greater moral power, endurance, courage and nonviolence than men" (Gandhi)
- ▶ 非暴力運動 (Sattyagraha) =>大衆女性にとって、はじめて政治的主体となる契機

女性による女性への暴力

- ▶ サティー (寡婦殉死)
- ▶ 19世紀にイギリス植民地下で禁止
- ▶ 「伝統」「宗教」「貞操」vs「野蛮」「暴力」「犯罪」
- ▶ 「サバルタンは語ることが出来ない」 (Spivak)
- ▶ 周辺の女性のagencyは?

19 世紀にイギリス植民地下で、犯罪あるいは暴力として禁止されますが、多くのヒンドゥーの男性たちが、これはヒンドゥーの伝統であり、宗教行為であり、女性たちはサティーをする権利がある、女性たちは喜んでサティーをすると主張し、イギリスによる禁止に対して、抵抗をしていくわけです。

スピヴァクの有名な『サバルタンは語る事が出来るか』という本の中でも、スピヴァクは、このサティーを取り上げて、サバルタンとして女性の声は聞かれないと言っているわけですが、私自身が非常に気になるのは、これはサティーを描いた絵ですが、サティーを見学している人たちの中で、サティーをする女性の周りにいる女性たちの声も、また同時に、聞かれることはないだろう、ということです。彼女たちは、サティーをする女性を encourage しているのか、force しているのか、それとも、悲しんでいるのか。周りにいる女性たちは一体、何を、どんな役割を果たしていたのだろうか、ということも、我々は聞くことはできないわけです。

彼女たちも暴力の加担者なのか、それともやはり、暴力の犠牲者と言えるのか、あるいはそのような二分法で分けることは、もしかして、ふさわしくないかもしれませんが、暴力というものを考えるときに、女性の agency というものを、どのような視点から考えたらいいのだろうか、という疑問があります。

それは現代のダウリ殺人も同様です。ダウリと呼ばれる持参財を女性側が持つていくのですが、そのダウリが少ないということを理由に、サリーに火をつけられて殺されるということが、インドではしばしば起こっています。その際に、閉じられた家庭という空間の中で、多くの場合、女性がその犯罪の犯人として検挙されることが多いです。

名誉殺人も同様です。娘たちが、例えばレイプにあったときに、その娘を家族が受け入れるということは名誉に問題があるので、その被害者である娘を、家庭内の年長者が殺してしまう、ということも、しばしば起こり得ます。

こうした、例えば、母親による娘への暴力、あるいは、義母による嫁への暴力のように、intimate な関係の中での暴力というものを、どのように捉えたらよいのか。とくに、私は不妊という問題を扱っていますので、不妊である若い女性たちにとって、もっとも厳しい存在というのは、多くの場合、家庭内での年長の女性たちなのです。彼女たちが、不妊である若い女性をいかに説得し、複婚といわれる、夫に二人目の妻をめとらせるのか、あるいは、離婚を促すのか、といったような暴力があります。

ただ、その中で、女性たちが、すべて犠牲者であるかということ、それだけではなく、実際に子供がいない女性たちが、自ら、二人目・三人目の妻を夫のために用意することも起こっています。彼女たちがどういう人を連れてくるかということ、例えば、障害を持っている女性とか、非常に年の若い女性とか、そういう人を第二婦人として、夫のために自分が用意すると。その中では、犠牲者である女性と、さらに、犠牲者化された女性という入れ子状になった暴力というものが、微細な日常生活の中ではみられます。

私からの感想としては、フェミニズム、女性研究の中で、こうした様々なかたちの暴力というものと、女性の関わりというものを考えるきっかけを今回与えていただけたと思っています。

